

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

北太平洋先住民社会に関する比較研究構想＜共同研究＞

環北太平洋地域の先住民社会の変化、現状、未来に関する学際的比較研究—人類史的視点から—

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館 公開日: 2021-04-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009689

北太平洋先住民社会に関する比較研究構想

文・写真 岸上 伸啓

私はこれまで35年以上にわたってカナダ・イヌイットやアラスカのイヌピアットの文化や社会の変化について研究をしてきた。私自身は一匹狼的な研究者であり、グループによる調査や研究を好まない。しかし、民博に赴任して以来、何度か共同研究を組織し、実施するようになった。なぜならば、共同研究には一人ではできない研究を可能にする力があるからである。

この30年近くの間、温めてきたテーマのひとつが、環北太平洋地域の先住民社会の比較研究である。1993年～1994年に文部省派遣の在外研究でカナダに滞在していた時に、米国ワシントンのスミソニアン協会国立自然史博物館に極北考古学者のウィリアム・フィッツヒュー (William Fitzhugh) を訪ねた。その時に彼から「君はなぜカナダ・イヌイットを研究しているのか。日本に住んでいるのに、なぜ環北太平洋地域の先住民文化を研究しないのか」と質問された。以来、日本を含めた北太平洋地域にも興味を持つようになった。

しかし、目の前に山積した仕事のために、環北太平洋地域を対象とした研究をできないままだった。最近、定年退職が近づきつつあることを意識するようになった私は、民博での最後の共同研究として「環北太平洋地域の先住民社会の変化、現状、未来に関する学際的比較研究—人類史的視点から」を行うことを決心した。

なぜ環北太平洋の先住民社会の研究なのか

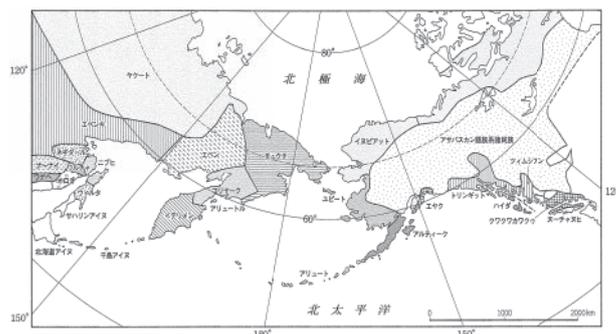
環北太平洋地域とは、ほぼ北緯30度以北の太平洋を挟んだ新旧両大陸の沿岸地域および島嶼部を指す。すなわち、日本列島北部、サハリン島、アムール川流域、千島列島、カムチャツカ半島、チュコト半島、アリューシャン列島、北アメリカ大陸アラスカ沿岸および北西海岸地域を含む広大な地理的範囲である。そこには10以上の先住民が居住している。彼らは、北太平洋という海洋環境を共有し、海獣や魚介類に恵まれているという条件を共有している。

文化人類学の歴史をひも解くと、この地域の研究史は100年以上にもおよぶ。19世紀終わりに北太平洋の旧大陸側と新大陸側に住む先住民社会の間には、ワタリガラス神話やサケの初漁儀礼の存在などといった文化的な類似性が見られることが知られていた。そこで「アメリカ人類学の父」と呼ばれるフランツ・ボアズ (Franz Boas) は、1897年から

1902年にかけてニューヨークのアメリカ自然史博物館を拠点としてジェサップ北太平洋調査プロジェクト (Jesup North Pacific Expedition) を組織し、W.ボゴラス (Bogoras) や W.ヨヘルソン (Johelson) らロシア人研究者とともに先住諸民族の調査を実施した。彼らはこの調査で両大陸側の先住民文化間の歴史的関係を究明しようとしたが、諸文化間に共通性とともに差異も見られ、東西の諸文化は起原を同じくし相互に関係があるといった一般的な結論に達することができなかった。

その後、1922年にソビエト連邦が成立して以降、米ソ間の政治的な対立がおもな原因で、北太平洋沿岸地域では米ソを含む国際的共同調査を実施することができなかった。その状況に変化が見られたのは、1980年代のペレストロイカ期である。1980年代後半に米国のスミソニアン協会国立自然史博物館の W.フィッツヒューは、ロシア人らの研究者とともに北太平洋地域の先住民文化の共同研究を実施し、その成果として19世紀の物質文化に焦点を合わせた展示「大陸の交差点—シベリアとアラスカの諸文化」を開催した。さらに1990年代にはいると同博物館のイーゴリ・クルプニク (Igor Krupnik) がジェサップⅡ・プロジェクトを提唱し、ワシントン (1993年) やニューヨーク (1994年) で国際シンポジウムを開催し、その成果を出版した。この流れで2000年には北海道教育大学の谷本一之と北海道大学の井上統一が札幌にて国際シンポジウム「ワタリガラスのアーチ」を開催した。

1990年代には日本では東京大学の渡辺仁が環北太平洋地域の文化要素の共通性を環境要因と伝播要因から比較検討し、「北太平洋沿岸文化圏」の概念を提案したほか、北海道大学



北太平洋沿岸地域の諸民族の分布地図 (出典：岸上 2015: 8)。



アラスカ先住民イヌピアットのドラムダンス（2013年2月、パロー村）。

と京都大学で教授を務めた宮岡伯人は環北太平洋の各地の先住民社会に多くの若手研究者を派遣し、言語調査をさせた。また、民博の大塚和義は、2001年に佐々木史郎（当時民博、現国立アイヌ民族博物館）と筆者とともに北太平洋先住民の交易とそれに関連する先住民儀礼・工芸の隆盛に関する特別展「ラッコとガラス玉」を民博にて開催した。

以上のように、1990年代以降、日本人研究者らはこの地域の先住民社会や文化に関する研究において、きわめて重要な貢献をしてきたといえることができる（岸上 2015; 2020）。ただし、21世紀にはいると、日本においては研究者の引退や逝去によって、この地域の先住民に関する研究は低迷してきたといわざるをえない。

環北太平洋地域をめぐる研究課題

これまでの研究によって環北太平洋地域の先住民社会の歴史は、先住民の立場から見ると（1）自律期、（2）接触期、（3）被植民地化期、（4）被同化期、（5）政治的自律化期、（6）未来の6つの時期に大別することができる。

環北太平洋地域の先住民社会の研究課題は、いかに歴史的に文化的な共通性や相違が生み出されてきたかを解明することである。これまでの研究蓄積によって、環北太平洋沿岸地域における先住民文化間に見られる類似性と共通性が出現した要因として、①生態環境が似ていること、②サケやアザラシなどの豊かな水産資源に生活の基盤を置いてきたこと、③歴史的に交易といった相互交流があったことなどが指摘されている。また、人類の新大陸への移動については、考古学や古代生態学、遺伝学の成果が総合されるようになった。これまでの研究に基づき、環北太平洋沿岸地域における先住民文化の現状を比較研究し、現状から同地域の過去と将来を考える共同研究を実施したい。

共同研究でとりあげる問題は大きく分けると次の5つの問いに整理することができる。

- （1）旧大陸の先住民は、いつ、どのような経路で新大陸に渡り、広がっていったのか
- （2）新旧両大陸の先住民の間で文化的な類似や差異はどの

岸上 伸啓（きしがみ のぶひろ）

人間文化研究機構理事、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授（併任）。専門は文化人類学。編著書に『捕鯨と反捕鯨のあいだに—世界の現場と政治・倫理的問題』（臨川書店 2020年）や『世界の捕鯨文化—現状・歴史・地域性』（国立民族学博物館調査報告SER149）（2019年）、『捕鯨の文化人類学』（成山堂書店 2012年）などがある。



カムチャツカ半島先住民コリャークのドラムダンス（1994年7月）。

ように創り出されてきたか

- （3）ヨーロッパ人や中国人、ロシア人、和人らとの交易や戦争、交流、そして植民化によって先住民の文化や社会はどのように変化してきたか
- （4）新旧両大陸の先住民社会は、日本、中国、ロシア、米国、カナダという国家に併合され、同化政策などによってどのように変化してきたか
- （5）新旧両大陸の先住民は現在、どのような問題に直面し、どのように対処し、彼らの未来を開拓しようとしているのか

私たちはこれらの課題を学際的な共同研究で究明したいと考えている。おもに考古学者と生物人類学者が課題（1）と（2）を研究し、おもに文化人類学者や歴史学者、言語学者は課題（2）～（5）を研究する。そして、その成果を学際的に検討し、環北太平洋地域における先住民の社会と文化の過去、現在、未来の全体像を理解し、提示したいと考えている。

引用文献

- 岸上伸啓 2015「環北太平洋沿岸地域の先住民文化に関する人類学研究的歴史と現状—日本人による文化人類学的研究を中心に」岸上伸啓編『環北太平洋地域の先住民文化』（国立民族学博物館調査報告132）pp. 7-77. 大阪：国立民族学博物館。
- 2020「北米アラスカ・北西海岸地域研究から見た環北太平洋沿岸諸先住民文化の比較研究の展望」北海道立北方民族博物館編『第34回北方民族文化シンポジウム網走報告書 環北太平洋地域の伝統と文化4 アラスカ・ユーコン地域』pp. 1-6. 網走：北方文化振興協会。